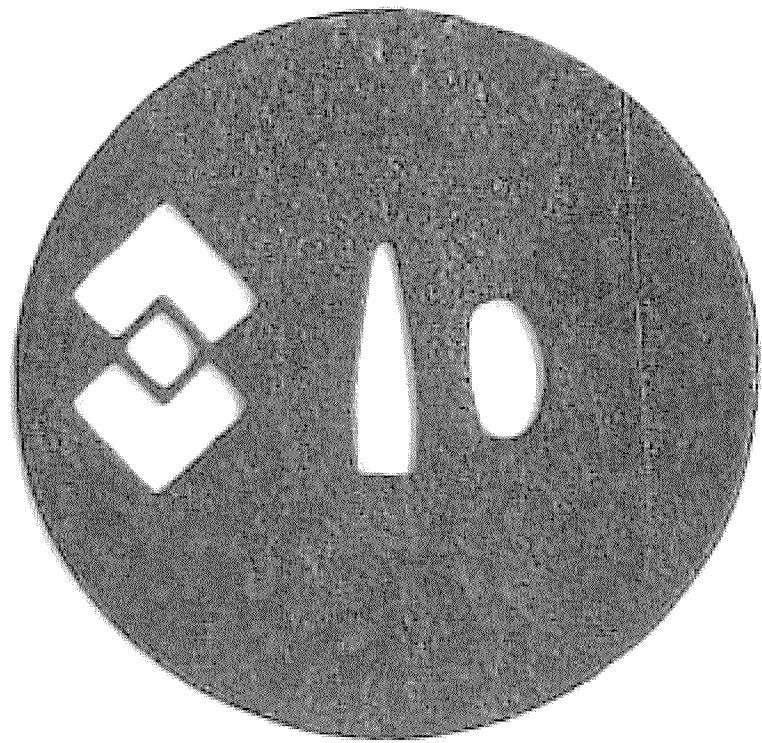
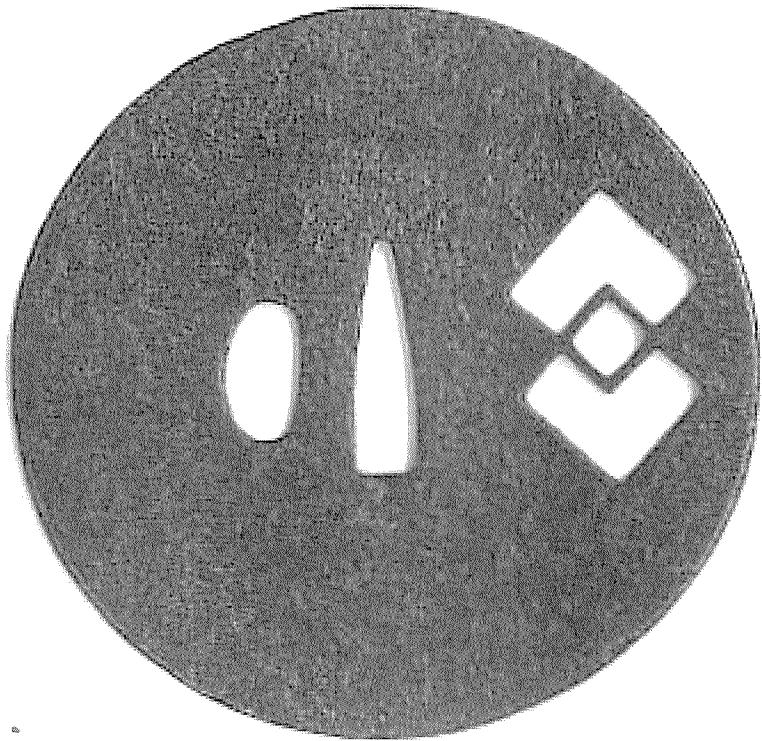


護拳の誉れ傷のある鐔（古刀匠「二つ角紋透かし」）

伊藤三平

この鐔は無銘であるが、「古刀匠鐔」と分類されるものである。古刀匠鐔の中ではやや厚い方で、耳の厚さは3・8ミリある。そして大きさも比較的大きい方で、縦が97・6ミリ、横は99ミリである。小柄樋があるが、当初からのものだと思う。

同様の造り込みの古刀匠鐔が存在するから、古刀匠鐔と称されている鐔工群の中のある一派の作風と考えられる。

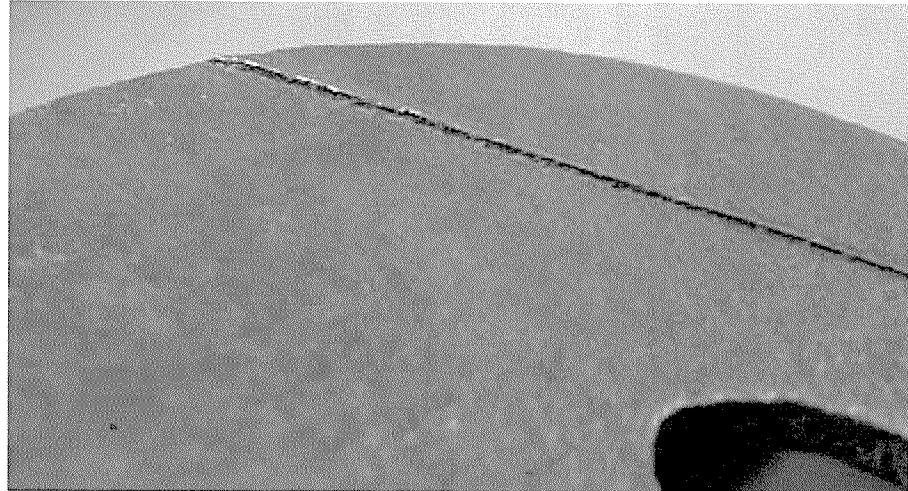


戦乱の世の実用品であり、何枚も作られたと思われ、法隆寺西円堂に伝わる鐸にも同じ図柄の鐸を見た記憶があるが、『鐸集成』（中村鉄青著）にも所載されている。この書では透かし文様を「二つ角」としているが、私が調べた範囲の家紋関係の本には「三つ角」という名称がなく、似ているのは「縦違い角」であるが、先人の言を尊重して「二つ角紋」透かしとしておく。この旗印を持つ軍団の支給品だったのであろうか。

裏を見ると一筋の盛り上

がった線。「何だ？ これは？」と思つてみると、店主が「刀傷ですよ」と言う。刀傷ならば、「刀凹んでいるのではないか、これは逆に盛り上がっていると思、ルーペで見ると、盛り上がりがついている両脇を挟んで細い筋が凹んでいる。すなわち、盛り上がりがつているのは、刀を打ち込まれた時の衝撃で周囲の鉄が盛り上がっているのだ。刀の中心の銘字においてタガネ枕が立っているのと同じことである。

私も長い間、多くの鐸を見てきたが、刀傷のある鐸ははじめてだ。刀では切り込み傷として、棟や鎧に三角形の食い込み傷がついているものを拝見したことがある。私は未見だが、矢を受けた矢目とい



う傷もあると言う。いずれにしても刀傷は薔薇の傷とされて、欠点とは見なされていない。そして刀剣では研ぎが入るので、傷で盛り上がった箇所は平らにしてあり、凹んだ傷だけが残っている。鐸は研ぐわけにはいかないから、このような盛り上がった斬撃痕がそのまま残っているわけだ。

何でも傷物の鐸を高いお金を出して買うこともないのだが、私は薔薇傷、命冥加の傷として大事にしている。

鐸の役割は①柄を握る手が刀身の方へ滑らないようにする為、②相手の攻撃から、自らの手を護る為、③刀剣を振った時のバランスの調整の為（切つ先に重心があると重く感じ、手元にあれば軽い感じ）とされている。副次的な役割として、④刀を抜く時に、鞘を握り鐸を親指で押して僅かに抜いて（鯉口を切る）抜きやすくする為などが挙げられている。いずれの役割もあると思う。忍者が刀を堀に立てかけ、鐸に足を掛けて堀に登り、長い下げる緒で刀を手元に回収すると聞くが、眞偽は不明である。

この鐸は上記②の役割を見事に果たしたわけだ。

武士・足軽は刀剣を佩用していたが、戦国時代の主戦武器は槍、弓で、後期になると鉄砲である。人間は離れて戦いたいのである。もちろん戦いであり、最終局面では接近戦も生ずる。長い武器（手槍など）が失われた時や、熟功の証として首級が必要な時には刀を抜いての戦いも生ずる。この鐸の斬撃痕は、戦いの最終段階における接近戦において、相手の渾身の打ち込みを、この鐸で受け止めた証であろう。鐸の裏に、上部が深い斬撃痕があるのがその証左である。受け止めたというより、無我夢中の斬り合いの中で、この鐸が相手の斬撃から身を守ってくれたのだ。戦が終わってから、この鐸の斬撃痕を見て、感謝したと思う。そして子孫に先祖の武功談と一緒に伝わったのではなかろうか。

あるいは、この鐸を信仰する神社に奉納し、それが伝来してきたものかも知れない。

江戸時代になると、刀装は武士身分のファッショーンの一部となる。登城用や冠婚葬祭時は、今の背広にネクタイ姿と同様に、黒呂色の鞘に、黒糸の柄巻き、柄下の鉤は白である。そして身分によって下げ緒の色や、鐔や縁頭は差があるが、赤銅魚子地の無地や、そこに家紋や龍、獅子の刀装具を据えたものとなる。平常指^{さんし}カジュアルウェアとなると、各人の個性、財力が出るが、鐵鐔でも各種の斬新なデザインで巧緻な加工の透かし鐔が生まれている時代である。古刀匠や古甲冑師作と総称される鐵鐔は時代遅れのファッショングアイテムとなって、身に付ける人はいなかつたと考えられる。ご先祖様の武功の証の鐔といえども同様であろう（現存する古刀匠鐔や古甲冑師鐔は、保存されたままであつた為か、表面はともかくとして、保存箱に接する裏面が錆びで荒れているものが多いと感じる）。

桜田門外の変以降のテロリズム横行の時代になると、刀劍は天誅^{てんぢゅう}という暗殺に便利な武器となる。火繩銃や槍、弓を剥^む出しにしての横行は咎められるし、暗殺には向かない。文久二年（1862）には京都だけで天誅として60人近くが暗殺されたと伝わる。その暗殺者に対抗する治安部隊として文久二年に生まれたのが新撰組である。刀には刀で対抗したのである。

刀劍が実用の武器になるに連れて、鐔も影響を受けるが、時代は幕末であり、同じ鉄鍔でも信家風のものが流行する。

武器としての刀が復活した時代には、刀の切れ味が脚光を浴びる。江戸時代前期に、剣術が介者剣法（鎧兜を着た武者相手の剣術）から素肌剣法（鎧兜を着用していない武者相手の剣術）に変化した時にも山野加右衛門、勘十郎家を中心とする「試し斬り」が盛んに行われたが、幕末にも山田浅右衛門家を中心にして盛んになつた。

加えて幕末には「荒試し」なることが行われる。池田屋事件では新撰組隊士の刀が折損していることが記録されているが、当時の貧乏武士の安い刀は粗製滥造品で折れやすかつたという面がある。

「荒試し」は切れ味もさることながら、刀の耐久性のテストであり、松代藩、水戸藩、松江藩での史料が知られているが、嘉永六年（1853）の松代藩の

荒試しでは、鐵板、鍛鉄、鹿角、兜などと同時に厚さ一分三厘（約4mm）の四分一（銅と銀の合金）の鐔を二回試したことが記録されている。「荒試し」を実見した武士の話では「その折りの模様はまことに峻烈を極め、見物の諸士（百人以上）も進行につれて真剣そのもの。手に汗を握るが如く、肌に粟を生ぜしが如し」という状況だったようだ。この荒試しで山浦真雄の刀が真価を發揮したことが知られている。

水戸藩では、はじめに「棒試し」として、直径一寸位で長さ六尺ほどの櫻の棒で、出来上がった刀の両側面を力いっぱい横撲りして、曲がりを試す。次ぎに棟を叩き、刃を斜め上から叩いて、刃こぼれしやすいか、どうかを調べる。そして、中に青竹を入れた「巻き藁試し」、さらに「鹿の角試し」である。水戸藩の武士の中には「水試し」として、乳の辺りまで水が来るところに入り、大上段に振りかぶり、水面を刀の平などろ（刀を横にして）で叩いて折損するかを試したと伝わる。

松江藩は石原佐傳次という豪傑と、彼の門弟によつて多くの荒試しが行われたと伝わる。刀工高橋長信は耳が聞こえないことを銘に切つてゐるが、この原因がこの荒試しに懊惱した為との伝承も残つてゐる。そして長信自身も自ら三度厚い鐵板に切りつけて試さない内は決して刀銘を切らなかつたという話が残つてゐる。余談だが日支事変において長信の刀で機関銃を斬つたとかで人気になつたという（拙著『江戸の日本刀』第25章 荒試し 松代藩・山浦真雄、水戸藩・勝村徳勝、松江藩・高橋長信一 参照）

この鐔も荒試しに使われたので、斬撃痕が残つてゐるという可能性もある。しかし、荒試しであれば、切断できなかつたら、再度の試し跡が残つてゐるのではなかろうか。どうせ荒試しで叩き割る鐔であれば、何度も試すと思う。